

## 長い夜の夢

——日本システムのTQA——

森 一久

よくも続くもの、と嫌になるくらい連日のように新聞紙上を賑わす「不祥事」や責任者の「謝罪」。その中には、最近総理大臣も取り違えたような、日本の社会が遅まきながら近代化した故に表面化したものも有るけれども、かなりの部分は、日本が国際社会の中で一人前に生きていくうえで避けて通れない、「日本システム」の総点検という大波に洗われて露呈した恥部といえよう。

その日本システムの再構築のため、各種の「改革」が議論が花盛りであり、行政改革では二十もあった省庁を十二にスリムにしようとか、財政改革では2003年までに赤字国債をゼロするといった、従前に比べれば極めて革新的な手段が論じられている。しかし、そんな改革はいずれも、国民の各界・各層に大きな痛みを強いざるをえないものである上、その痛みは、とても公平にとりかねなく、というわけには行かないものばかり。さらに、改革の実行に当たる人の大部分は、在来のシステムの中をのし上がった方々で、その品格が冒頭で述べた様な体たらくでは、日本システムの改造は容易なことではない。

願みれば品質保証の最初は、ハードの管理によって生産品の品質を確実なものにしようとする努力から始まり、それが全社的品質管理TQCなどを経て今日の品質保証QAへと発展するにつれて、ソフトは勿論、関与する人間をも視野にいれた総合的なものへと脱皮・発展してきた。そして最近では国際的に、組織全体を対象するものへと進もうとしている。

新しい日本システムでは、その節々で大切な役目を担う方々が、国際的にまた社会的に新鮮な感覚に富み、国民が手本にするに足りるだけの品性を備えていることが前提となることは明らかである。

そこで、このような「品性」を保証する上で、QAの経験や手法が、なにか役立たないものか、というのが、長い夜の続くにほんの一隅で見た、私の夢である。